

故郷第二場面 読んだ読んだ

三年三組

氏名

この時突然、わたしの脳裏に不思議な画面が繰り広げられた。紺碧の空に金色の丸い月がかかっている。その下は海辺の砂地で、見渡す限り緑の西瓜が植わっている。そのあと、彼は父親にことづけて、貝殻を一包みと、美しい鳥の羽を何本か届けてくれた。わたしも一、二度何か贈り物をしたが、それきり顔を合わす機会はなかった。

主人公、三十年近い昔のことを思い出した。レントウだ。レントウは主人公や主人公の友達が知らないことを知っていた。いつも四角な空でちいさな世界で生きていた主人公は、大きな空を見ているレントウのことを神秘の宝庫だと思った。正月が過ぎてレントウと別れることになった。別れた直後は贈り物を贈ったが、それきり遊ぶことはなかった。

さん

主人公は、自分が知らないチャーや五色の貝殻、チャーのことなどを知っているレントウを神秘の宝庫だと思った。そんな自分の遊び仲間とは違うレントウと遊んでいろんなことを知り、あこがれを持った。しかし、楽しかった時間が過ぎ、別れの時間が来てしまい、二人とも別れるのが嫌で泣いていた。お互いにとって、大好きで特別な存在だった。でも、その後は贈り物を少しするだけで、二人は会わなかった。だから、二人の会いたいという感情は薄れていった。

さん

主人公とレントウは互いに大切な存在だった。社会的な立場は主人公の方が上だが、知識が多く、世界を知っているレントウの神秘の宝庫へ憧れを抱くと同時に、堀という環境に縛られている自分に劣等感を覚えた。別れの時こそ嫌がって泣いていたり、贈り物をしたりしていたもの、お互い顔を合わす機会はなく、一時の絆の深い友達だったのだ。

くん

主人公にとってレントウは、「神秘の宝庫」つまり宝みたいな存在だった。社会的には主人公の方が上だが、知識が多いレントウを主人公はあこがれていた。レントウとの別れが寂しく、泣いて嫌がっていた主人公だったが、それ以来、数回贈り物を贈っただけであり、顔を合わす機会もなかった。主人公とレントウの絆は一時的な深い絆であった。

さん

主人公は、鳥の取り方や五色の貝殻、チャーという見たこともない動物について知っているレントウの心を『神秘の宝庫』とたとえ、高い堀に囲まれ、見上げてても四角な空しか見えない自分の生活と比べ、様々な体験をし、のびのびと生活するレントウにあこがれ、うらやましく思っている。また、この正月、主人公とレントウは、家族に近い親友のような関係だったが、それは勘違いで、正月以後は会う機会はなく、一時の関係であった。

さん